円通院と高山家

下町にある禅刹大慈山円通院は、応仁元年（一四六七）に開創されたと伝えられている。

秋元泰朝が、寛永十年に谷村城へ移封した初め頃、下谷の鎮門を出た附近、竹之鼻に円通庵として建てられていたが、鎮門の側に寺院があっては不都合のため、寛永十六年（一六三九）に現在地（茶園場）に諸堂を移し、円通院と改めたものである。

移転の年代については、両谷村には寛永十六年、甲斐国志には寛永十年秋元氏領地の初め、領主の計として諸堂今の地に移しとあり、また円通院記録には慶安三年（一六五〇）移転したとある。

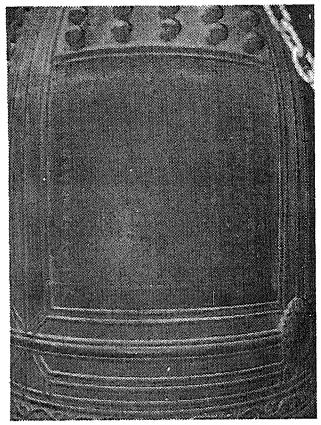
円通院鐘楼（都留市）

泰朝は谷村に移封後、寛永十三年に十日市場、谷村間の大堰を起工し、これを三年間で完工している。竹之鼻の円通庵境内を二分して大堰は開さくされており両谷村に誌された寛永十六年に円通院は現在地に諸堂を移し終ったのではないだろうか。

円通院の記録によると、本尊釈迦牟尼仏、達磨大師像、大權修理菩薩像は、高山五郎兵衛長繁の妻が、延宝四年（一六七六）に勧請したと誌されている。五兵衛長繁については、前記したとおりであるが、「五郎兵衛」とあるのは「五兵衛」の誤記と思われる。

鐘楼と梵鐘は現存しており、高山甚五兵衛朝繁が、円通院に帰依して信仰した母親の供養のため三十三回忌に梵鐘を鋳造して建立したものである。

この甚五兵衛朝繁の母は、傅右衛門繁政の後妻で繁文（麋塒）にとっては祖母にあたるわけである。通称は松といゝ、梵鐘の銘文によると当時三州吉胡（よしこ）（愛知県渥美郡田原町）の住侶寺島家から嫁した人である。



円通院の梵鐘銘（部分）

三州吉胡は、田原藩の領地内で、当時の藩主は秋元喬朝の実父戸田忠昌の伯父に当る戸田忠能で、のち忠昌が養子となり遺領を継ぎ秋元喬朝は父が田原藩主のとき生れている。

また、秋元富朝の妹が戸田忠昌に嫁しており、喬朝を秋元家の養子として迎えるに際し、高山繁政が尽力し、その功により二百名の加増を得たことも、寺島氏を介しての交渉があったのではないだろうか。

大慈山円通院鐘銘並序

冥報記曰聖述隱顕隨人発興矣夫梵鐘之
施主高山氏甚五兵衛尉平□繁之祖高山
氏平右衛門尉平繁勝者上州新田素生始
臣任□秋元之明家奉従□越中洲
刺史長朝公彼繁勝之男同氏傳右衛門尉
平繁政臣任□泰朝公兼富朝公累代以
所補一家之梁臣彼繁政之男甚五兵衛尉
平朝繁仕如今準老□但州刺史喬朝公
務□官家者旧之棟職君為君則臣為臣也
寔哉有其所謂朝繁之妣母者生于寺嶋氏
家三州吉湖之住侶承応二歳次昭陽大荒
落之春已係于痼疾雖用官医数輩之針薬
弗獲厥験嗚呼命哉臻其暦姑洗下之八費

（□印空白）

其行年耳順之後重于三春終告于仆殂孝
子朝繁大慟哭而做悲哀過于恒竟相攸於
甲之都留郡谷村大慈山円通禅院殯千比
窆其遺骸若彼円通院諸堂全備而雖盡荘
厳之美不繫梵鐘則豈其非闕如耶因焉而
朝繁欲営妣母追悼之修薦鋳大鐘一口繫
于堂抑梵鐘之功徳洪哉宜律師感応記曰
有祇洹戒律院内于銅鐘重三十萬斤目連
以通力撃之則聲震鐘形如吳地又有戒場
院于大鐘形如盃器上有十輪王像文有九
龍八功徳水此大鐘却初之時輪壬所造文
有祇洹論師院于一銅鐘形如腰鼓是乾闥
婆王之所造文六帖曰修多羅石鐘者拘楼

秦佛所造佛滅度後婆竭羅龍王収去至釋
迦佛與龍復將来至佛滅度已龍將去文續
高僧傳説禅定寺僧鳴鐘之功徳如今挙梵
鐘之因由取其一二或又若周禮鳧氏所制
于鼓制舜等文禮記曰鐘聲鏗々又文選東
京賦曰鏗卒鐘薜綜註之做蒲宇之説等文
准南子曰景公大鐘等又左傳吳公于聞鐘
声之類偕是楽鐘之来而非梵鐘事類余聞
二三子抵制鐘銘莫謬其同異凡撃鐘之例
以三十六聲以抵三回也故如今以三十六
韻准其法数

銘曰

大慈応礼　寺号円通　妣情曷忘
祖令立功　徳隣有比　禅刹受崇
孝覃衆庶　威擬大蟲　覚一炊睡

治三種聲　彩椽琢宇　盡棟渡虹
王堦温潤　硅殿玲瓏　影梃盧泰
気壓恒嵩　仰斉山頂　伏待天聰
法器何欠　施財積昱　小而弗擇
多文難充　鋳鎔宇内　橐籥虚中
彼成正如　其就慎終　盡哉造物
至也治工　嫺臺用雀　金屑従童
梵鐘新做　杵杼己家　監高横永
外滿裏空　肥叱感業　目連打夢
傳家福楽　吾道興隆　声亘南北
名屬西東　衢母亡羊　郷聚英雄
未央自若　竺土趣同　境寛萬戸
地濶幾弓　礎類碼磑　砌似錫銅
石塊如功　塔樣猶鼈　神祭社稷
鬼出獄籠　能兼品物　才抵無窮
帶土峯雪　慕甲府風　宿長程驛

眠旅泊蓬　市朝不隔　阡陌既忽
湲林茂緑　籬菊散紅　樹園霊廟
松動祝融　現江水妙　望乾坤洪
篆文日月　銘刻蒼穹　齢臻單越
寿比崆峒　記年邇兆　億世延躬

参考「甲斐国志」「両谷村」「止静」

貞享三歳次柔兆接提格季秋中旬

龍穏現住老全版橈野水誌焉

施主　高山甚五兵衛尉平朝繁

鋳物部大工　推名伊豫　藤原良寛

同　兵庫　藤原重長